

ビバハウス便り No. 123 合宿型支援活動の終了について 2017年12月17日

青少年自立支援センター ビバハウス

責任者 安達 俊子

今回は大変悲しいお知らせです。2000年9月1日より今日まで、数え切れないほど多くの皆様の物心両面にわたる暖かいご支援を頂き、17年間以上の長い間継続をさせて頂いたビバハウスの活動の中核とも言うべき「合宿型支援制度」を、全く残念な事にこの12月半ばで終了せざるを得ない事態となりました。この12月15日に、恒例のエイヴランドホテルでの「ビバ・クリスマス会」をもって、最後の公式行事を終了致しました。

これまでの「ビバハウス便り」でもお知らせしましたように、この間、坪内主任指導員の咽頭癌の発病など重大事態もありましたが、何と言っても、最大の要因は、私達二人の高齢化です。いよいよ今年は尚男78歳、俊子75歳と二人とも後期高齢者になりました。俊子が北星余市高を退職し、尚男が余市町町議会議員を終了したのにあわせ、今流行の言葉で言えば「シニア・セカンドライフ」のひとつとして始めたのが「ビバハウス」でした。

ひとりの北星余市高卒業生の「俊子先生、助けて！」の悲鳴に応じて始めた仕事でしたが、本当のところは、これほど長く続けるとは当初は思っていませんでした。私達は当初から、引きこもりなどの若者をお世話だけすればよいと思わず、この施設を通じて、引きこもりなどを生み出さない社会をつくるための仕事が出来ればよいと思っていました。大げさに言えば、「ビバハウス」は社会への挑戦の場と考えていました。

ですから、それまで民間任せで、何もしなかった国（厚生労働省）が、2005年に全国で合宿型支援施設「若者自立塾」を開始すると同時に申請を出し、全国20箇所のひとつ、北海道では唯一「ビバ」が正式認定を受けました。全く残念ながら、5年後、民主党政権に変わるや否や、2010年に廃止されてしまいました。当初から「合宿型」でなければ若者達の本当の成長は期待できないと確信してきた私達は全国的な抗議行動を行い、期間限定ながら「基金訓練合宿」を国に認めさせました。「基金訓練」は短期で終わってしまいましたが、それ以降も私達は一貫して「合宿型」に拘ってきました。

今回の「合宿型」終了に当たり最大の仕事であった現在の利用者（全国から6名）のための新しい落ち着き先を高崎指導員が遠くは兵庫県や愛知県とも連絡を取りながら、驚異的な頑張りで、全員の行き先を確保してくれました。この様にできたのは2年前、夫・尚男が緊急入院となった時にかけて下さった、ビバ卒業生のお母さんが再び、茨城から応援に来てくださり、食事作りから若者達の荷造りまで、お手伝い頂いたおかげです。ビバとしては、「合宿型」は終了しますが、今後「超少子・高齢化社会」を見据えた「ビバハウス創立12周年記念日」（2012年9月1日）に掲げた「こども・若者・年寄り元気村構想」の本格的な取り組みのため現在の施設で現在の体力で出来る範囲の相談活動などの準備を開始する事にしています。重ねて、本日までの変わらぬご支援に心からの感謝を申し上げ、取り急ぎ、「合宿型」終了のご挨拶とさせていただきます。本当に長い間お世話になりありがとうございました。